



進むオーストラリアの幼稚園・保育所 これからの保育と自然体験の現場をみるツアー - 実施レポート -

視察企画 (財)日本生態系協会
後援 (社福)日本保育協会、(社)全国私立保育園連盟
協力 (株)ジャクエツ、(株)チャイルド本社、
ひかりのくに(株)、(株)フレーベル館、(株)メイト

2010年2月22日～2月27日の6日間、「進むオーストラリアの幼稚園・保育所 これからの保育と自然体験の現場をみるツアー」を実施しました。

本ツアーには、幼稚園・保育所の設置者や保育者、大学の研究者、学生など、全国各地から13名の方々が参加し、メルボルンとシドニーを中心に州の機関や園などを訪問しました。

乳幼児期は、心を育む大切な時期です。乳幼児期のあり方が問われる今、本ツアーで訪問した幼稚園や保育所では、自然体験を大切にし、また園での日々の生活を通じて、資源やエネルギーなどを大切に使い、ゴミを少なくするといった態度や習慣を子どもたちが身につけられるように、積極的に取り組んでいました。





サステナビリティ・ビクトリア

ビクトリア州政府の機関。将来の人々のことを思いやり、今ある自然を手渡すことができる社会の実現に向けて、様々なプロジェクトを行っています。

現在、この機関では小学校以上を中心に、学校の生活環境を「地域の野生の生きものたちとの共存」「省エネルギー」「水の節約」「ゴミの少量化」を中心に環境改善に取り組むプロジェクトを進めています。この環境改善には、教員のみならず、子どもたち、保護者等が連携して行うことを促しています。

現在、幼稚園・保育所においても、同じようなプロジェクトを進めようと検討がされています。

RMIT 大学

スー・エリオット先生の講義

エリオット先生には、以下のようなお話をいただきました。

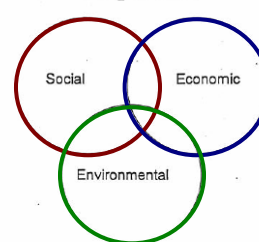
これからの時代、保育者も将来の人々がくらしやすい社会について考える必要があります。そのために、まず保育者は「自然」が「経済」「社会」を支えているというつながりを正しく認識することが大切です。その上で、子どもたちに自然やものの大切さを、園での日々の体験を通じて教えていく必要があります。子どもたちのために、園庭や園舎でどのような環境を整えたらよいかは、保育者同士で、また保護者とも相談をしながら、見つけていきましょう。様々な工夫の仕方があるはずです。そのときに、子どもたちにも環境改善に参加する権利と機会を与えるとよいでしょう。園庭に欲しい環境を描いてもらったり、改善作業に参加してもらったりと、様々な関わり方が考えられます。



Education for sustainability:
beyond rocks and logs in
outdoor playspaces

S
RMI

The pillars of sustainability
or the triple bottom line



イアン・ポター財団「子どもの庭」

キッチンガーデンと名づけられた菜園には、人間が食べる作物と、自然の生きものたちが食べる野草の両方を育てる工夫がされています（写真左下）。こうすることで、菜園では一種類の虫だけがたくさん増えることを防ぐことになります。子どもたちは、ここで自然界の食う食われるの関係についても学びます。もちろん、ここでは農薬は使いません。

この庭には、他にも低木のトンネル、水辺、ミミズがたくさんいるコンポスト（写真右下）など、訪れた子どもたちが、自然を五感で感じ、自然の仕組みを楽しみながら学ぶ、たくさんの仕掛けが用意されています。



コバーク保育所

この園では、子どもたちが園での生活を通じて、自然や環境にやさしい態度や生活習慣を身につけるために、様々な工夫をしています。例えば...

- ・虫や野鳥と子どもたちが会えるように、園庭に地域の自然の木や草を植える。
- ・水遊びは雨水タンクの水を利用する。
- ・手を洗った水は、園庭の植物にあげる。
- ・壊れたら修理を徹底し、捨てない。
- ・再生や自然分解が可能な製品を買う。
- ・工作をするときには、遊び終わったら自然に戻せるように、ボンドなどは使わない。
- ・使い捨てのものは使わない。 など

こうした園での取り組みは、入園説明会のときから保護者に説明されます。保護者からは今では大きな賛同を得ています。

コーニッシュ・キャンパス・ アーリー・ラーニング・センター

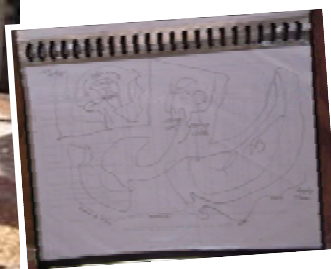
天候の善し悪しに関係なく、どんなときでも野外に出かけるのが、この園のモットーです。保育者は、自然の中を散歩しながら、子どもたちに自然との一体感、自然への感情移入を促し、自分たちが自然や環境のために、園の中でできることを考えさせます。

園庭にも自然を取り入れています。例えば、地域の自然の木を植えています。自然の野草も景観に配慮しながら植えています。そうした環境で、子どもたちには豊かな感性が日一日育まれています。



セントキルダ&バラクラバ幼稚園

この園では、大学と連携を図りながら、「地域の野生の生きものたちとの共存」「省エネルギー」「水の節約」「ゴミの少量化」に取り組んでいます。地域の自然の木や草を植えたり、水遊びには雨水を利用したり、生ゴミはコンポストにし自然に戻したりと、できることから始めています。園庭を改善するときには、子どもたちも参加し、園庭にあると良いものを描き（写真中下）保育者や保護者が子どもたちの意見を踏まえてひとつの案にまとめました。そうしたなかで、子どもたちのけんかも減り、豊かな感性が育っています。



KU ラッシュカッターズ・ベイ幼稚園

都市の中にあり、子どもたちが自分の意思で、自由に遊ぶことができるように、地域の自然の草や木を植えて、自然をたくさん創出した園です。

園内で毒グモなど危険な生きものに会う可能性もありますが、殺虫剤をもって取り除くことはせずに、身を守るための仕方を教えています。この保育方針には、将来子どもたちが様々なリスクに対応できるよう、子どものときからある程度のリスクを与えることは大切であるというねらいがあり、このことは保護者も理解の上、入園させています。そうしたなかで、自分のことは自分でする、しっかりとした子どもが育っています。



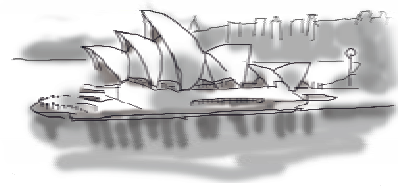
KU ピーターパン・ラ・ペルーズ幼稚園

自然と共存してきた先住民アボリジニの文化を取り入れ、自然の素材を使い、園の中で物質の循環が行われるような工夫をしています。例えばゴミ。ミミズにあげるもの、ニワトリにあげるもの、リサイクルするものなど、子どもたちは考えながら分別を行います(写真右下)。そうしたなかで、子どもたちには、過去の文化を知り、他の人々を思いやる心が育まれています。

なお、この園を管理する幼稚園連合では、将来の人々を思いやる社会に向けた人材育成が重要と考える企業の強い意向を受けて、7年前より幼児期からの保育にこうした活動を取り入れ始めたとのことでした。



視察を終えて



今の子どもたちは、便利さや快適さを手に入れる一方で、自然と切り離された生活が中心となりました。その結果、自然に支えられて今の生活が成り立っていることに、気づきにくくなり、ものや人、思いやりを大切にするといった態度や価値観を、家庭や地域を通じて学ぶ機会を失いつつあります。

オーストラリアでも、同様のことが起きていました。そうした中で、保育者が中心となり、園での日々の生活を通じて、子どもたちに、ものや人にやさしく、自然や資源を大切にする心を育てようと、園庭や園舎の環境づくりに工夫する姿がありました。またそうした園の取り組みを、大学の研究者や保護者が支えていました。

参加者からは、様々な事例の視察を通じて、「たいへん参考になった。地域の自然や文化を大切にする子どもが育つよう、園庭や園舎の環境を見直し、保育の仕方を工夫したい」、「たくさんの感動があった研修でした。まずは保育者間で、何が必要なのか、相応しい園のあり方について話し合う機会を持とうと思う」など、感想が寄せられました。

私たちの協会では、これからも将来のことを考え、美しい社会に向けて、ものや人、自然を大切する心を育む保育をご紹介できるように、環境先進国の行政や大学、幼稚園や保育所の取り組みについて、情報の蓄積を行っていきます。ご要望に応じて、個別に視察ツアーを企画しコーディネートすることも可能です。お気軽にご相談ください。



参加者のみなさんと視察した園の子どもたち